



大阪あいりん地区の視察。ホームレス状態にある人々の生活再建を支援する施設で公益財団法人大阪公衆衛生協会の事務局長から薬の管理の説明を受けた



結核対策の手法についてグループごとに発表を行った

を訪れた。集まっていたのは、ケニアやミャンマー、アフガニスタンなど12カ国から来た研修員たちだ。彼らの母国では、子どもの結核や、HIV/エイズに感染した人が免疫の低下により結核を発病し、命を落とす危険性の高い「重複感染」と呼ばれるケースがあり、問題は深刻だ。日本も結核の猛威と戦ってきた経験がある。今では薬で治る時代となったが、半世紀前までは多くの死亡者を出し、「亡国病」と恐れられた。

「それでも80年代初頭までには、結核患者数は著しく減少しました。国が政策・予算の両面で結核対策を重視し、民間でも各県に結核予防会支部を設置するなどして、官民が共に予防と早期発見・治療に努めたことが貢献したのです」。そう説明するのは、同研究所で長年研修を見守ってきた山田紀男国際協力・結核国際情報センター長だ。

研修の内容は、世界保健機関の専門家や外務省、厚生労働省を交えて決定され、世界の結核対策における最新の動向とともに、保健プログラムにも応用できる基盤の知識や日本の経験が学べるようになっていく。このような仕組みについて、コース責任者の平尾晋医師は、「結核は菌が体内に入ってから発病するまで数十年かかることもあります。そのため、発症数を減少させるには長期的な取り組みが必要だ。また、対策も時代に即した国際的な戦略に沿って行うことが重要なのです」と説明する。

### 研修員の日常生活を 全面サポート

この日は、3カ月にわたる研修の5日目。母国の結核の現状を説明する研修員らの発表も、まだどこかおぼつかない。そんな彼らに、

もう一つ、研修の特長がある。研修員の生活サポートの充実ぶりだ。公共交通の利用方法を教えたり、イスラム教の参加者をハラル食品店に案内するといった日常生活の支援に加えて、清瀬市長自ら日本文化を紹介したり、ボランティアが日本語学級を開校したりしている。「世界の結核対策の現場で、研修の修了生に同志として再会する瞬間は本当にうれしいもの。結核の領域を超え、保健医療分野全体を指揮する人材として羽ばたいてほしい」と山田医師はほほ笑んだ。



清瀬市のボランティアによる日本語教室で書道を体験する研修員たち

結核は日本でも静かに流行中  
結核——。予備知識はゼロに等しかった。資料に目を通すと意外にも「日本は、現在でも世界において中まん延国」とある。幼い頃に受けた「BCG」が、結核の予防接種だったことも分かった。人事のように思っていた病だが、日本の経験が世界の結核対策に生かされていると聞き、大いに興味を持った。

現在、世界では実に総人口の約3分の1が結核に感染している。死亡率は下がりがつつあるものの、2013年の推定では900万の結核発病者のうち、150万人が命を落とし、330万人は適切な診断や治療を受けられずにいる。結核患者は、主にアジアとアフリカを中心とする開発途上国に集中しており、開発分野における国際社会共通の目標「ミレニアム開発目標」でも、結核は世界が取り組むべき課題として挙げられている。

**長期的な取り組みを要する結核対策**

東京都清瀬市にある公益財団法人結核予防会結核研究所がJICAとの協力の下、結核対策の強化を目的に、開発途上国の研修員を受け入れて研修を始めたのは1963年。この歴史ある研修の場



胸部X線写真の読み方を指導する平尾医師

結核 From Japan 日本

## 世界の結核対策を担う人づくりを

風邪に似た症状だが、放っておくと命にかかわる病、結核。今なお世界で猛威を振るう結核の制圧を目指した対策に、日本の研究所が50年以上にわたって取り組み続けている。



1965年当時の研修の様子。講師の島尾忠男医師は、今も現役で指導にあたっている



清瀬市